（１）学習・授業関係（Ａ・Ｂ類型グループ）

ア．研究主題

Ａ・Ｂ1 類型における各教科等の指導のあり方　～学ぶ喜びを感じられる授業実践～

イ．研究主題の理由

（ア）本校児童生徒の実態

児童生徒の良さとして挙げられるのは「素直さ」や「従順さ」である。一方、課題として挙げられるのは自己肯定感の低さである。具体的には、進行性の疾患という児童生徒の抱える厳しい現実や、入院生活からくる経験の乏しさから、自信がなく、自分の考えや意見を伝えることに消極的だったり、自発的に行動を起こすのではなく言われたことをこなすという受け身で、他者に依存的だったりする。

（イ）研究主題の設定理由

本校児童生徒の課題を解決するために、「学ぶ喜び」を児童生徒に感じさせられる授業づくりが大切だと考えた。学ぶ喜びについて「『できた！わかった！』の経験の積み重ねが自信となり、さらに自分から課題を見つけ、追求した結果に得られる『できた！わかった！』となり、『もっと学びたい！』と学びのサイクルがつながっていくこと」と定義した。「学ぶ喜び」を児童生徒に感じさせることで、自己肯定感を高め、積極的に自分の考えや意見を伝えたり、自主的・主体的に行動できたりする児童生徒に成長するのではないかと考え、研究主題を設定した。

ウ．研究仮説

各教科等においては、適切な実態把握に基づく指導内容及び指導計画の工夫・改善を行い、授業においては、主体的・対話的で学びが深まる場を設定することで学ぶ喜びを感じられるだろう。

エ．研究の内容・方法

（ア）実態把握　　個別の指導計画、入学時の調査書等で児童生徒の実態を確認した。
（イ）指導案検討　　対象児童生徒の実態に合った授業であるかを、グループで検討した。
（ウ）授業実践　　検討したことを基にして授業を行った。
（エ）事後の検討　　研究主題に沿った授業ができたかを検討し授業改善を行った。

オ．研究授業一覧

日時	教科・授業名	学部・学年	授業者
11／28（火）	国語・伊能忠敬と自分を比べて読もう	小学部・Ａ類型	梅澤
11／29（水）	美術・版画の魅力　～シルクスクリーン～	中学部・Ａ類型	佐藤
11／30（木）	体育・スラローム	高等部・Ａ類型	水谷
12／１（金）	生単・日本の地域の特徴を知ろう	高等部・Ｂ類型	柳澤

対象学年：　小学部６年	教科名・単元名　国語「伊能忠敬と自分を比べて読もう」
生徒の実態	準ずる教育課程で学んでいる男子生徒１名である。障害名はデュシャンヌ型筋ジストロフィーで、教師の補助を受けながら、事実と感想、意見の違いをとらえながら読むことができていた。しかし、読み取った内容から自分の考えや立場を明確にしながら読むことには至っていない。
本時の目標	・文章を読んで伊能忠敬の生き方や人柄を考え、自分の考え方と比べる。
本時の内容	・教師の選んだ場面を読み、伊能忠敬のエピソードをもとに「考え方や人物像」・「自分ならどうか」を考えて発表する。

研究仮説①　適切な実態把握に基づく指導内容及び指導計画の工夫・改善について。

仮説①にもとづく手立て	成果　○　　課題　△
・学級担任と授業担当の教員間で情報を共有した。	○生徒の実態において、他教科でも共通の課題があることがわかり、授業の流れや板書構成などを他教科と統一することで児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。
・WISC-Ⅳ、PVT-R の結果から、児童にとって学習しやすい方法を検討した。	○児童の活動方法などについて、児童が理解しやすく取り組みやすいものを設定することができた。

研究仮説②　主体的・対話的で学びが深まる場を設定する。

仮説②にもとづく手立て	成果　○　　課題　△
・主体的な学びとなるよう、学習の目標を児童と相談して決めさせたり、毎時間の冒頭に単元の学習計画を提示したり、同じ流れで学習を進めたりすることにより、児童に活動の見通しをもたせる。	○児童が見通しをもてることによって、自身の学習の進み具合を感じることができ、落ち着いて学習に取り組むことができた。 ○自分で目標を決めることで、学習への意欲を高めることができた。
・対話的な学びとなるよう、学習の振り返りで子どもが気づいたこと、疑問に思ったことを質問する。	○児童の発言に質問を返す形で児童の考えを深めさせ、自己との対話をさせることができた。
・学びを深めるため、「自分と比べながら読む」という視点をもって読書できるよう、読書活動でも今回の学習を想起させる。	△授業の中で「自分と比べながら読む」ことに取り組むことはできたが、他の読書活動との連携はできなかった。

対象学年：　中学部１・２年	教科名・単元名　美術「版画の魅力～シルクスクリーン～」
生徒の実態	準ずる教育課程で学んでいる男子生徒２名である。障害名はデュシャンヌ型筋ジストロフィーで２名とも筆記によるスケッチが可能である。表現活動では、概ね意欲的に取り組むことができるが、鑑賞活動では自信のない様子や発言が見られる。２名とも個別の指導計画の重点目標にコミュニケーションの課題が挙げられており、生徒Ａは、状況を考えずに自分が伝えたいことを一方的に話してしまうことや、生徒Ｂは、自分の考えを言葉や文字で伝えるのが苦手である。
本時の目標	・様々な種類の版画や友達の作品について、技法や作者の意図や表現の工夫などを感じ取りながら自分の価値意識をもって鑑賞することができる。 ・自分の作品についての特徴や制作意図、課題などについて説明することができる。
本時の内容	友達の作品を鑑賞して、コメントカードを作成する。自分の作品について項目ごとに解説文を書き、鑑賞シートを作成し発表する。

研究仮説①　　適切な実態把握に基づく指導内容及び指導計画の工夫・改善について。

仮説①にもとづく手立て	成果　○　　課題　△
・個別の指導計画における重点目標の確認や他教科や学級で見られる姿の情報収集を行った。 ・単元の最初にグループ内で授業研究を行い、他教科での実践アイデアを参考にした。 ・生徒の実態と研究主題を踏まえ、版画の中でもシルクスクリーン版画を選択した。 ・計６時間の指導計画の内１時間目と６時間目に鑑賞の授業を設定した。	○生徒の実態において、他教科でも共通の課題があることがわかり、美術科としての言語活動に対するねらいを設定することができた。 ○毎授業最初の５分を使って様々な版画のミニ鑑賞会を実施し、鑑賞するする抗感が少なくなった。 ○身体の負担が少なく製版と刷りができた。 ○版画の特性として色を変えて何度も刷ることができるので、１枚ごとに問題点を見いだし、工夫・改善することができた。 ○完成後、客観的に自他の作品をとらえることで、作品の良さや課題に気づくことができた。

研究仮説②　　主体的・対話的で学びが深まる場を設定する。

仮説②にもとづく手立て	成果　○　　課題　△
・単元計画を提示し、毎時間の目標確認と授業の最後に達成度を問う振り返りを行った。 ・版画工房より様々な版画の作品をお借りし、実物に触れる機会を設けた。 ・先生方に生徒の完成作品を先生方に見てもらった感想や意見を活用した。	○見通しをもって制作に取り組み、主体的に課題に向き合う姿がみられた。 △生徒によって目標に対する自己評価がパターン化する傾向にあった。 ○実物を手で触れることによって鑑賞意欲を高めることができた。 ○先生方からの感想を通して、感じ方の違いを知ることができ、文章表現においても参考にすることができた。また、自分の作品を肯定的に捉えることができた。

対象学年：　高等部１・２・３年	教科名・単元名：　保健体育（体育）・スラローム（陸上競技）
生徒の実態	・電動車いすの操作技術が高い。 ・年度当初に比べ、課題解決の方法を試行錯誤しながら練習やゲームに取り組む姿が見られるようになってきたが、思考が十分でないため、課題解決の本質まで至らないことが多く、効果的な練習に取り組むことが課題である。
本時の目標	・フィードバックを通して、自己の課題を明らかにし、根拠のある解決方法を考える。 ・教師が提示した技能の習得を目指して、主体的に練習に取り組む。
本時の内容	・教師が提示した技能の習得を目指し、試行錯誤を繰り返しながら練習に取り組む。生徒の運動の様子に対して、教師は様々なフィードバック（言語、映像、記録）を行い、試行錯誤する際のヒントを与える。

研究仮説①　　適切な実態把握に基づく指導内容及び指導計画の工夫・改善について。

仮説①にもとづく手立て	成果　○　　課題　△
・指導時数が４時間と少なかったため、習得する技能を２つに絞るなど、指導内容を精選した。 ・試行錯誤しながら練習に取り組むことでタイムが速くなることをより実感させるために、全コースを使用したタイム測定は初回と最終回の２回に限定した。 ・授業担当者等と打合せを行い、生徒の実態把握に取り組んだ。	○習得する技能を明確に示すことで見通しがもて、主体的・意欲的に学習に取り組んだり、短時間で効果的な練習に取り組んだりする様子が見られた。 ○結果的に全ての生徒が大幅に記録を更新することができ、試行錯誤することの大切さや面白さを実感させることができた。 △教師の電動車いすの性能や操作方法に関わる知識が不十分だった。

研究仮説②　　主体的・対話的で学びが深まる場を設定する。

仮説②にもとづく手立て	成果　○　　課題　△
・生徒が様々なフィードバックを通して、自己の課題解決に向けて試行錯誤する場を設定した。	○回を重ねる毎に、課題解決の着眼点がよくなり、課題解決の方法が具体的になった。それにあわせて、タイムも速くなった。 ○映像によるフィードバックは、自己の運動の様子を客観的に振り返る良い機会となった。 ○記録によるフィードバックは、生徒毎に白板を用意し、「良かった点」「課題」「課題解決の方法」等を書き出したことで、生徒の思考を整理したり、深めたりする良いツールになった。 ○「教師が教える」授業ではなく、「生徒の考えを引き出す」授業を心掛けたことで、主体的・意欲的に学習に取り組む様子が見られた。 △試技の回数が 3 回に留まってしまい、運動量が少なかった。

対象学年：高等部１年女子	教科名・単元名：生活単元学習「日本の地域の特徴を知ろう」
生徒の実態	高等部１年の女子であり、Ｂ２類型で学習を行っている。気管切開をしており、２４時間呼吸器を使用するなど高度な医療的ケアを必要としている。これまでの学習では、言葉によるコミュニケーションが可能であり、小学校中学年程度の漢字や都道府県名、アイドルの名前や文章を読み、ある程度内容を理解している。既習済みの事項を思い起こし、教師に伝えることができる。不慣れな人や場所では緊張し、言葉が出ないことがある。
本時の目標	・インターネットでの検索を通して、調べる事項に着目することができる。 ・各地の特色を理解することができる。
本時の内容	・事前学習で選択した県のゆるキャラ、食べもの、おまつり、人口、産業、ＡＫＢのメンバーをインターネットで調べる。

研究仮説①　適切な実態把握に基づく指導内容及び指導計画の工夫・改善について。	
仮説①にもとづく手立て	成果　〇　　課題　△
・これまでの学習の積み重ねで、本生徒の興味関心や意欲を持って取り組める学習を把握し、題材として設定した。	〇入学時の資料と本人に実態がかけ離れている箇所があり、実態を把握してから指導内容を考えることができた。 〇本人ができる活動を取り入れることで、意欲的に取り組み、達成感を持たせることができた。 △調べる内容が多くなり、設定した時間内に終えることができなかったため、内容を精選する必要であった。

研究仮説②　主体的・対話的で学びが深まる場を設定する。	
仮説②にもとづく手立て	成果　〇　　課題　△
・本人の選択や関心に配慮し、発言なども取り入れるようにした。	〇発言に教師が積極的に答えることで、本人の意欲を引き出すことができた。 〇調べる順番など本人が主体的にかかわれる場面をつくることで、多くの発言を引き出すことができた。 〇学習内容を提示し、見通しをもたせることで学習内容を確認しながら進めることができた。 △個々の事項について、由来などさらに調べて深めていくことが難しかった。 △本人の意思を確認しながら進めるため、やりとりに時間が必要であった。
・選択した県を日本地図で確認し、粘土で作ることで興味をもちやすくした。	〇県を形で示すことで、調べる内容を自ら確認しながら進めるなど意識付けを図ることができた。

カ．研究のまとめ

（ア）研究仮説の検証

①適切な実態把握に基づく指導内容及び指導計画の工夫・改善について

小学部（国語）の実践事例では、教員間や病院関係者と児童についての情報交流の機会を充実させたことで、児童の心身の状態を多面的・多角的に捉えることができ、デュシャンヌ型筋ジストロフィーの児童への筆記量を軽減させるなどの身体的な配慮と教科としての学習のねらいの両面の視点で授業内容の構築及び指導内容の工夫を行うことができたと考える。

中学部（美術）の実践事例では、個別の指導計画に基づき生徒の実態を把握することで、生徒の教育的ニーズと教科として「育てたい力」の整合性を図ることができ、他教科との共通課題を把握することで美術科としての言語活動のねらいや指導計画及び授業内容の設定することができたと考える。また、木版画に比べ、体への負担が少ないシルクスクリーンを学習活動に選択したことで、最小限の支援で生徒が主体的に造形活動に取り組むことができた。

高等部（生活単元学習）の実践事例では、生徒が学ぶことに興味や関心をもって学習に取り組めるよう、これまでの学習過程や興味関心のある事柄を把握することで、実生活に即し、生徒が主体的に学習できる指導内容及び指導計画を構築することできたと考える。

②主体的・対話的で学びが深まる場の設定について

小学部（国語）の実践事例では、単元計画を児童と共有することで、児童が学習の見通しをもち主体的に取り組め、自らの学習活動を振り返ることで、次時への学習意欲を高めることができた。また、学習過程のなかで、自己や教師との対話の機会を充実させたことで、児童の変容を捉え、考えの広がりや深まりを実感することができたと考える。

高等部（体育）の実践事例では、自己の課題解決に向けての試行錯誤をする場を設定したことで、生徒の課題解決の着眼点を養うことができ、「思考・判断・表現」する中で、これまで得ていた「知識・技能」を更新することができた。ＩＣＴ機器を活用して振り返りを行うことで、自己の様子を客観的に捉えることができ、それを記録として残しおくことで生徒が自己の成長や変容に気がつくことで、「学ぶ喜び」を実感できたと考える。

キ．成果と課題

研究の成果として、一つ目に個別の指導計画の再確認や教員間や関係機関との連携を図りながら多面的・多角的に児童生徒の実態を適切に把握することができた。また、「育てたい力」や各教科等でのねらいを明確にすることで、一人一人に応じた指導内容及び指導計画を構成できたり、教材教具の改善を図ることができたりしたと考える。二つ目に、習得された「知識・技能」が「思考・判断・表現」において活用されるという一方通行の学習過程だけではなく、「思考・判断・表現」する中で「知識・技能」が更新される学習過程を実践したことにより、学習内容の深い理解につながる「深い学び」の実現に迫ることができたと考える。

各教科等においての「主体的・対話的で深い学び」への方向性が見いだされてきたが、教科横断的な学びの充実が今後の課題であると考える。教科横断的な学びの充実を図るために、教科間のつながりを密にし、獲得した「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」を日常生活の中で活用できるように指導及び支援方法を追究していかなければならない。